「羽」は、〔Pani〕〔Pani〕〔Hani〕〔Hani〕〔Fani〕があり、「臍」は〔Pusu〕〔Pufju〕〔Poso〕〔Hoso〕〔Foso〕があり、「墓」は〔Paka〕〔Faka〕〔Haka〕がある。

これらの他にまだ相当数の調査語い、特に語中、語尾のP音とF音、共通語音のB音に対するP音の現われは、興味ある課題である。

なおその分布図（前頁）をきわめておおざっぱに示しておく。

国語教育と外国語教育

志賀　謙

ごく限られたものを除いては、日本の学生は概して英語が不得意である。大学生といえば、中学高校時代既に数年間英語にしたしんでおり、それにもかかわらず、英語に弱いという事実は、とりもなおさず、私達英語教育に携わるものが、如何に無能であるかという証左ともいえる。しかし、自分達の無能がひき起した問題を、なにも他に転嫁するつもりは毛頭ないのであるが、この現象は、我が国に於ける国語教育にも関係しているのではないかと近頃切に感じるようになった。

私が、日本の学生は英語に弱いと感じたのは、この数年来特に云々されている、実用英語の点についてではない。この点についていえば、従来からの旧式な英語教授法が依然として踏襲され、またマスプロ教育の様相がはげしくなっている現状に於いては、無理もないことと思われる。しかし、私が指摘したいと思うのは、従来の方法でも充分カバーできる英

語の領域が、現在多くの学生のウィーク・ポイントになっており、それがどうやら、国語教育のとり残した問題から派生していると思われることである。

抽象表現の問題がそれである。抽象表現といえば、日本の学生程、これを用いたがる種族はいまい。まだしらべたことはないが、日本の学生の、抽象表現の使用頻度なるものを、外国の学生のそれと較べてみたら、面白い結果が出てくるのではなかろうか。客観性を前に押し出し、責任所在をぼかすのに好都合な受動表現と共に、学生の論文作成の際には、表現内容とは関係なく、抽象表現が、虎の威をかりる式の恰好な道具として用いられている。しかし、抽象表現にこれ程強い偏向を示す学生も、その理解の面では甚だこころもとない。それが英語が不得意だという形で現われている。そして、自国語では、大いに使い乍らも、英語などの抽象表現に弱いというのは、自国語に於いても、その面に対する理解が充分行われていないのではないかという危惧をいだかせる。このように、抽象表現の偏向が、そのまま、その理解にむすびつかない所に、国語教育、並びに外国語教育の問題がある。

言葉の使用は、元来が一つの抽象過程であるが、英語に於いて、特に抽象度の高い表現の一つとして、ネクサス実詞がある。これは一つの文の、中心述語になっている動詞・形容詞の流動性をとめて静止させ、抽象化することによって、その文全体を名詞に転化する場合であって、これを日本語で例に示せば、次のようになる。

彼の　自然の美　の強調は

彼は自然が美しいということを強調しているが、それは、彼の作品にもよく現われている。

したがって、原則的には、文中のネクサス実詞つまり抽象名詞の数は、その文が潜在的に含んでいるネクサス（従文）の数を意味していることになる。つまりこの種の抽象名詞の機能は、ネクサスを多く内包する複雑な概念が簡単な構造の文で容易に表現できる点にある。

しかし、日本の学生の場合、複雑な概念を手際よく簡潔に処理するという抽象表現の本質が充分に理解されていないようである。それよりはむしろ、抽象表現のもつ形式的な効果に重点がおかれている。たしかに抽象能力が抽象表現を生みだすのであるが、日本語に於いては、抽象表現によって抽象能力を評価するわけにはいかない。しかし現実には、平易な表現がとりもなおさず、内容の低俗性、抽象能力の欠如を意味するという、誤った考え方で、抽象表現が用いられることが多い。そして日本語の場合には、このような本来の機能以外に、抽象表現を用いることが出来るようになっている所にも問題がある。

日本語に於ける抽象表現は、造語性の強い漢字と、英語の

両者の影響から、かなり違った性質のものとなっている。日本語の場合、それは、上述のような、ネクサスを凍結して名詞に昇華するという本来の機能（例・我々の目的実現にとって、必要な手段はこれだ／彼は国民の幸福をねがっている）の他に、慨して、「～する」「～になる」というような無色の動詞と結合して、容易に動詞としての機能（例・彼はその目的を実現した／彼は幸福になった）を果すことができる。日本語に於ける、ネクサス実詞のこの二重性は、欧米諸国の影響から、漢字による造語を余儀なくされた時に、日本語の文体の問題として当然処理されねばならなかったものであり、それが現在までとり残されて来たために、ただ日本語自体の問題だけではなく、英語のような外国語教育の面でも、「抽象表現はよく使いたがるくせに、外国語の抽象表現には弱い」という奇妙な現象を生みだしている。この辺の問題処理が国語教育の面で、現在でも適切に行われているかどうか、外国語教育にも少からず関連する問題である。

私が、この一見些細のように思われる問題をとくにとりあげたのは、ただそれだけの目的からではない。これと全く同じ種類の、しかも新しい問題が、国語教育と外国語教育共通の問題として、現在提起されているからである。カタカナによる外来語の問題がそれである。

現在、我々をとりまくマス・コミが日毎に目新しい外来語をつくり出して、その斬新さを競いあっており、そこには従来のような国語教育や外国語教育ではカバーできない日本語の現象が、徐々にその領域をひろげつつある。現在の所、国語教育の面からも、また外国語教育の面からも、それと積極的に取組む姿勢はとられていない。もし、先の抽象表現の場合のように、このカタカナ外来語の問題を、ただ手をこまねいて、日本語自体の問題として積極的に処理することを怠るようなことがあれば、将来の日本語の姿にあたえる影響は、先の抽象表現の場合よりは、ずっと大きなものになるにちがいない。それだけに、国語教育と外国語教育の一層の協力がのぞまれる。

×　×　×